

日本作曲界の開拓者

伊福部 昭

日本人であれば一度は聴いたことがあるであろう「ドシラ、ドシラ、ドシラソラシドシラ…」のメロディー。

それが何の曲であるかを知らなくても、どこかで耳に

したことがあるはずです。このあまりにも有名な曲、そう、映画「ゴジラ」の音楽を生み出したのが伊福部昭でした。

昭は一九一四年、現在の釧路市幣舞で伊福部家の三男として生まれました。伊福部家は因幡国（現在の鳥取県東部）の古代豪族の血筋でした。神奈川県の警察官であった父利三が辞令を受けて釧路警察署長になるため、家族は釧路に移り住むことになりました。昭の出生地が北海道の釧路であるのは、そうした理由からでした。

その後、家族は、根室や網走に移り住み、父利三が日本で一番広い村と当時言われていた音更村村長に就任した



「作曲にのぞむ」〔伊福部極蔵〕

のを機に、音更に移り、昭は九歳の時に音更尋常小学校に編入しました。

この音更の地で過ごした三年間の体験が、昭の独創的な作曲活動に大きな影響をもたらすことになりました。

帯広から音更に向かう途中には、先住民民族であるアイヌの人たちのコタンがありました。

アイヌの人たちは、和人とは、それほど親密にならない生活を営んでいました。音更の住民も、どことなくアイヌの人たちを敬遠していました。

しかし、昭はアイヌの人たちと頻繁に交流の場をもつことで、魚や鳥の捕まえ方、アイヌの人たちの民族楽器であるムツクリ、トンコリなどの扱い方を教えてもらいました。彼らのさまざまな民族文化にも接することができました。父が村長をしていた関係もあり、昭は自然な形でアイヌの人たちの生活に入り込んでいきました。

特にアイヌの人たちは、よく出身地の民謡を口ずさみました。幼い日の昭の耳にも、そのメロディーが知らないうちに染みついていきました。アイヌの人たちと交流すること全てが伊福部音楽の一つの大きな土壌となりました。また、音楽・詩・舞踊が一つに融け合い、心情のおもむく

ままたに歌い、踊るアイヌの人たちの民族音楽・民族舞踊から発する音楽は、昭を夢中にさせました。こうした民族文化に接する中で、ある出来事が昭を作曲への道に導くことになりました。

昭がアイヌの人たちの家に遊びに行ったときのことです。その家の家族が飼っている犬の姿が見えなかったので、理由を聞きました。すると友人が「死んだのだ。」と答えました。二人の会話を家の奥おくで聞いていた友人の祖父が、「あれはいい犬だった。犬が死んでこんな悲しいことはない。かわいそうなことをした。」などとつぶやき始めました。その悲しみはやがて歌のような節となっていく、祖父は延々と犬を失った悲しみを歌い続けました。昭は圧倒あつとうされ、いいようなない感動を覚えました。歌い終えた祖父に、昭は「何という歌ですか。」と聞きました。「たったいま作った歌だよ。」と祖父は答えました。そのとき、昭は民族が異なると、音楽というものはこれほどまでに違うというはだみことを、肌身で知りました。「音楽を作るということは、それほど大げさなことではない。構えて作るものでもない。自発的に生まれてくるのが本当の音楽だ。自分の感情に任せればよいのだ。自分にしかできない音楽を作りたい。」

昭の中に、こうした思いが日々強くなりました。

元号が大正から昭和に変わった年、昭は音更から札幌に出て、札幌第二中学校（現札幌西高等学校）、北海道帝国大学（現北海道大学）農学部へ進んでいきました。中学校に入る前から独学で励んでいたヴァイオリンは、当時の一流のヴァイオリニストであり、札幌新交響楽団の創設者兼初代指揮者であった田上義也たのうえよしやに教えることうでまえで腕前は上達し、「あんたにはもう教えるところがねえや。」と言わせるほどでした。

大学卒業後、昭は厚岸町あつけしの森林事務所りんむかんに林務官として赴任し、春から秋は松の苗なえを育て、冬は樹木を伐採して売却する業務を行っていました。そうした仕事に従事する傍ら、アマチュア作曲家として作曲活動に没頭ぼつとうしていききました。そして、オーケストラ作品「日本狂詩曲きょうしきょく」を完成させたのです。

昭はこの曲をパリのチェレプニン賞作曲コンクールに応募しようとした。日本からの応募作品を日本の審査員しんさいいんが取りまとめる際には、「これはひどい。」「日本の恥だ。」「対象外にしよう。」「小さな町の無名の二十一歳の若者なんて。」という声が上がりました。しかし、作曲家であ

*おおきまさお
る大木正夫の「審査するのはパリなのだから、とにかく作品は送るべきだ。」という強い反論に日本の審査員も納得し、チェレプニン賞作曲コンクールに応募することができました。

その結果、「日本狂詩曲」は第一位に入賞したのでした。この知らせに日本の審査員は驚き、北海道の厚岸という小さな町に、オーケストラ作品を書ける作曲家などいるはずがないという思いから、入賞は間違いではないかとパリに問い合わせの電報を送ったほどでした。

入賞した後、「日本狂詩曲」はボストン・ピープルス交響楽団によりアメリカで初めて演奏され、海外から高評価を獲得しました。

海外で高評価を得てもなお、何事も西洋風を重んじていた当時の日本音楽界では、昭の土俗的*どぞくてきな音楽は、「こんな音楽じゃない。」と評論家に言われ、昭は「異端児*いたんじ」扱*ここういされました。昭は周囲から「孤高の人」と言われ、作曲した曲は海外では演奏されても、日本で演奏されることはありませんでした。チェレプニン賞作曲コンクールで第一位を受賞して約半年後、昭の音楽に感動していたチェレプ

ニンは、来日した際に昭を呼び出しました。

そこで昭はチェレプニンから一ヶ月という短期間ながらも、作曲法、

管弦楽法かんげんがくほうの個人レッスンを

を受けました。それまで

独学で音楽を学んできた

昭は、進んでいる方向性

が正しいことをチェレプ

ニンに認められ、自分の

考えが間違っていないこ

とを確信しました。昭の胸の内には自信と確かな手ごたえ

が芽生え、己のやり方を突き詰めていこうと決心しました。

一九五四年、映画「ゴジラ」の音楽を手がけ、映画の大

ヒットとともに昭の名も世間一般いっぱんに広く知られるようにな

りました。その後制作された多くの「ゴジラ」映画の中

でも昭の作ったフレーズが使われています。

また昭は『管弦楽法』というオーケストラで用いられる楽器の奏法、音域、音色の特性などをまとめた音楽の理論



「チェレプニンのレッスン」〔伊福部極蔵〕

書を書き上げました。

それは、世界に類を見ない、^{*}唯一無二の理論書として、音楽界で圧倒的な存在感を放ち続け、昭の音楽に対する探究心が計り知れないものであることの証^{あかし}となりました。

アイヌの人たちの音楽に影響を受け、土地に根ざす作品を独学で探究した伊福部昭はこう語ります。

「^{だれ}誰でも理屈^{りくつ}なしに、音楽の美しさに心を動かされた経験を一度は持ち合わせていることと思います。その真の美しさを発見するためには、教養と呼ばれるものを否定する位の心がまえが必要です。」

そこには、「本能を揺^ゆさぶるリズムにこそ本質がある。」という独自の考えに基づいて、物事を創り出そうとする強い気持ち^{きもち}が表れています。

昭は二〇〇六年^{きょうねん}享年九十一歳でこの世を去りました。しかし、「ゴジラ」のテーマ曲をはじめ、昭が残した作品は、永遠に私たちの耳と心に生き続けています。

一九一四	釧路市幣舞町で生まれる
一九二三	音更尋常小学校に編入する
一九二六	アイヌの人たちの音楽に触れる(九歳)
一九三二	札幌第二中学校に入学する(十二歳)
一九三五	北海道帝国大学に入学する(十八歳)
一九四六	北海道庁地方林課の厚岸森林事務所 ^{あき} に勤務する
一九五四	チェレプニン賞作品コンクールで第一位となる(二十二歳)
二〇〇六	東京音楽学校(現在の東京藝術大学)の作曲科講師に就任する(三十二歳)
	映画「ゴジラ」、「座頭市 ^{ざとういち} 」などの音楽を担当する(四十歳)
	死去する(五十歳)

- *ムックリ：アイヌの人たちの民族楽器、口琴の一種
- *トンコリ：アイヌの人たちの民族楽器、弦楽器の一種
- *大木正夫：古典や万葉の世界、神話等を素材とする作曲を得意とした日本の作曲家
- *土俗：その土地に古くから伝わる習慣
- *異端児：ある分野で、特異な存在とみられている人
- *孤高：世間から離れて、自分の志を守ること
- *唯一無二：この世でただ一つしかないこと